

収蔵可能な書籍120万冊、閲覧室730席、延床面積約20,000m²。これは明治32(1899)年にまとめられた「帝国図書館」計画案の概要です。そしてこれこそ、その一部のみが実現し、以後、全体が完成することなく使用され続け、「国立国会図書館国際子ども図書館」として保存再生された建物の、まぼろしの全体計画でした。

全体計画は、地下1階、地上3階で、中庭を囲む口の字形の平面をもち、南側正面に2階に至る大階段が付く、堂々たる古典主義様式の建築です。第1期工事竣工時のパンフレットに掲載された全体計画の平面図を見ると、3階の南側は、建物の差し渡しいっぱいに取られた「大閲覧室」で、一方、建物の北側部分はすべて、地下1階地上8層の「書庫」とされ、その1層分の平面の規模は大閲覧室と同じ大きさでした。

設計は、文部技師で建築課長であった久留正道の下で、文部技師の真水英夫が担当しました。

明治33(1900)年3月に、東側のブロックを全3期のうちの第1期工事として着工。その後予算の追加が進まなかったため、建設の規模を縮小し、6年後の明治39(1906)年

3月に竣工、開館しました。規模削減で削られたのは、南に面する大閲覧室の一部があるブロックで、ここは地下のみがつくられ、地上部は、大階段より北側だけが実現しました。

この明治期の本来の第1期工事分が完工するのは、開館から23年後、昭和4(1929)年の増築工事を待たねばなりません。しかしその後は、戦後になって書庫の増築が行われたものの、当初の全体計画はついに実現されることはありませんでした。

明治期東側1階部分の外壁。白丁場石の外壁は、赤煉瓦の構造壁に食い込むように一体化している。



明 治期に創建された建築の構造は、鉄骨補強煉瓦造と呼ばれるもので、赤煉瓦をセメントモルタルで接着して積んだ壁と、床を受ける鉄骨の梁が建物を支えています。赤煉瓦は表面には現れず、東側と北側の外壁には「白丁場石」と呼ばれる白い安山岩の一種とベージュ色の「ゴマ掛け煉瓦」が、西側の中庭側の外壁は白丁場石と「白薬掛け煉瓦」が、構造体の赤煉瓦壁と一体になるように積まれています。煉瓦の積み方は、東と北側がフランス積みであるのに対して、西側はイギリス積みでした。

昭和期に増築された南側の部分の構造は、鉄筋コンクリートの柱と梁で、現在の技術と基本的に同じものです。外観のデザインは明治期のものを踏襲していますが、石に見える部分は実は薄い人造石で、煉瓦ではなくタイルが張られています。

屋根は、明治期、昭和期共に天然スレート葺きで、棟と軒の部分は銅板を加工してつくられています。屋根を支える小屋組は、明治期が木造のトラスであるのに対して、昭和期は鉄骨のトラスです。石と煉瓦の技術が成熟した明治後期から、近代的な技術が普及し始めた昭和初期にかけての技術的な変化の過程が各所にのこされていることも、この建物の魅力であり、歴史的価値のひとつであるといえるでしょう。

明治の全体計画外観。彩色したところが当初の1期工事として計画された全体の約1/3の部分。その南側のブロックは昭和になって完成した。



東西断面図



南北断面図

白の部分は明治期の内装を保存復元している。

3階本のミュージアム北側の壁にあるエディキュール部分。創建時はここが書庫の出入り口だった。



既 存の建物は、そのまま利用するには耐震安全性が不十分でした。しかし、建物そのものに対する耐震補強は、保存すべき内外の意匠に大きな影響を与えてしまいます。それを避けるために、「免震レトロフィット工法」を採用しました。この工法は、既存の建物を地盤面から切り離して、地震による揺れの影響を、1/3~1/5に低減させるもので、建物本体の補強を最小限にとどめることができます。この建物では、地下1階部分の壁を撤去して、そこに免震装置(積層ゴムアイソレーターと鉛ダンパー)を設置しています。

国立国会図書館国際子ども図書館
〒110-0007
東京都台東区上野公園12-49
tel. 03-3827-2053
fax. 03-3827-2043
<http://www.kodomo.go.jp>

発行：平成28年11月

このパンフレットは、国土交通省
関東地方整備局が平成14年3月に
発行したものを一部修正したものである。

リサイクル適性

この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。

明治の煉瓦建築
国際子ども図書館
レンガ棟



内部の最大のみどころは、天井や壁の漆喰装飾でしょう。平成14(2002)年の改修で、3階の本のミュージアム(旧普通閲覧室)、2階の児童書ギャラリー(旧特別閲覧室)、1階の世界を知るへや(旧貴賓室)、そして大階段とそれに続く廊下の、漆喰仕上げの壁、天井、漆喰装飾を明治の創建時の姿に保存復元しました。

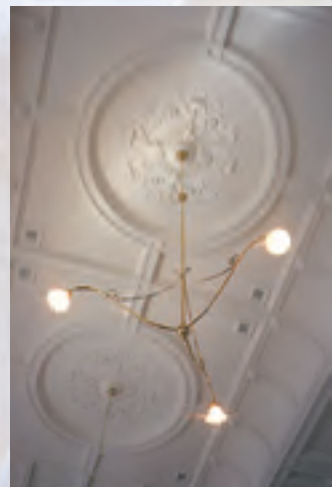
創建時の漆喰および漆喰装飾は、そのほとんどがのこっていました。しかし100年近くの間、度重なる改修工事で、漆喰の上は何層にもペンキで塗装されており、その塗装も各所で剥離していました。そのため、まず過去の補修による塗装を手作業ではがし、その上で表面に仕上げの漆喰を塗り直しました。また、設備配管工事や鉄骨の耐火被覆などのために撤去した部分では、「木摺り」という下地から復元しました。

この建物では、さまざまな漆喰仕上げの手法が使われています。その中でも、1階の世界を知るへや(旧貴賓室)の天井中央部は、鏝絵と呼ばれる職人の腕ひとつによる非常に細かい装飾が施されています。この部屋の修復には、使用する漆喰を当時と同じ材料配合でつくりました。

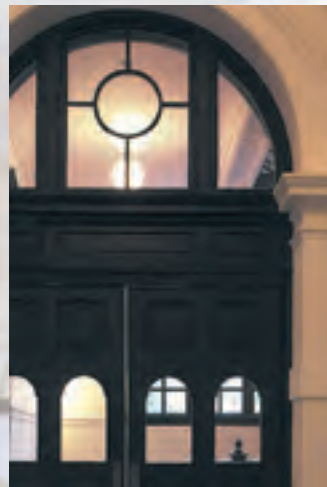
2階の児童書ギャラリー(旧特別閲覧室)には、漆喰で仕上げられた4本のオーダー(柱)があります。内部の鉄骨の柱と梁に耐火被覆を施すために、漆喰部分を一度撤去しましたが、柱部分の下地には竹を編んだ「竹小舞」が使われており、それによって柱の微妙なふくらみが表現されていました。また、柱を取り巻く立体的な装飾は、石膏の型に漆喰を詰め込み、硬化する前に型抜きして張り付けるという工法が使われていました。修復に当たっては、同様の手法で復元し、技術の伝承にも役立っていました。

照明器具で創建時のものがのこっていたのは、大階段のシャンデリアだけでした。本体は真鍮でつくられており、ガラスシェードは現代の乳白ガラスとは異なる石灰ガラスによるものでした。失われていた本のミュージアム(旧普通閲覧室)の3つのシャンデリアは、写真と既存の大階段のものを参考に

3階本のミュージアム(旧普通閲覧室)天井。シャンデリアは、当時の写真などを参考に復元した。



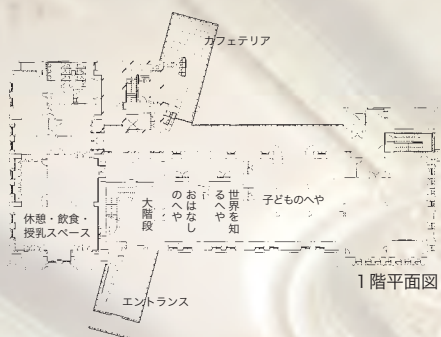
室内の木製の建具はケヤキ材でできた創建時のもの。調整した上でそのまま利用している。



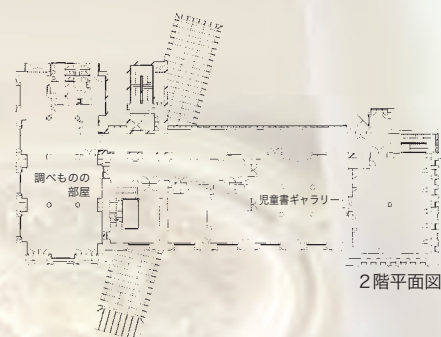
して復元したものです。また、世界を知るへや(旧貴賓室)の天井中央部のシャンデリアも失われていましたが、これは旧品が別に保存されていることが分かり、それをもとにして復元しました。児童書ギャラリー(旧特別閲覧室)は、明治創建時は上記2室と似たデザインの2灯のシャンデリアがあったことが当時の写真から確認されましたが、昭和の増築時に現在のものに改められ、それがのこっていました。そのため明治期の復元は行わず、昭和期のものをクリーニングして使い、一部を昭和期に復元しました。昭和期のホール(旧閲覧室)のシャンデリアと壁のブラケットも、同様に昭和期のものを再使用しています。

照明には、明治の創建時は地下の一部でガス灯が使われていた他は、電力が使われていました。ただし電球は、明治39(1906)年の時点ではタングステン電球は存在せず、より暗く寿命の短い炭素電球が使われていたものと考えられます。また、電球の内側をつや消しにする技術もなかったため、透明な電球であったようです。

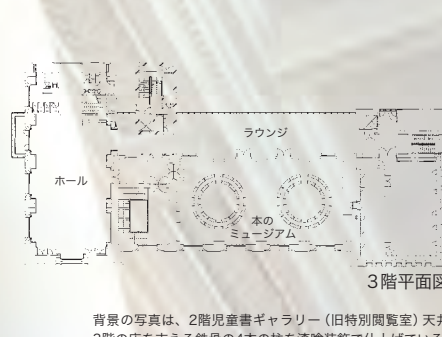
大階段は、明治期のインテリアの中でも最もダイナミックな空間です。1階の床から天井まで約20mの吹き抜きの回りを、鑄鉄製の手摺の付いた階段が取り囲んでいます。階段全体も鉄でつくられており、裏側にはフロー



1階平面図



2階平面図



3階平面図

背景の写真は、2階児童書ギャラリー(旧特別閲覧室)天井。3階の床を支える鉄骨の4本の柱を漆喰装飾で仕上げている。

2階にあるアーチ棟への連絡通路は省略している。

西側のラウンジ部分では、表面に釉薬を掛けた「白葉掛け煉瓦」と白丁場石の既存の外壁を見ることができる。

大階段は鑄鉄製で周囲の壁から片持ちで支持されている。段裏は木製フローリング。鑄鉄製の手摺が付いている。

